

令和 4 年 6 月 12 日現在

機関番号：17104

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K13784

研究課題名（和文）実践共同体における知識移転プロセスに関する理論的・経験的研究

研究課題名（英文）Theoretical and empirical studies on knowledge transfer practices in communities of practice

研究代表者

小江 茂徳 (Oe, Shigenori)

九州工業大学・教養教育院・教授

研究者番号：20611635

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、組織の現場で生じている学習のプロセスについて、状況的学習論の観点から理論的・経験的に明らかにすることを目的としている。これまでの経営学の領域における状況的学習論の展開は、実践共同体がもたらす組織のパフォーマンスへの貢献について注目され、状況的学習論が有していた学習に対する理論的含意のごく一部にしか焦点が当てられてこなかった。そのため、本研究では、状況的学習論の示唆していた理論的含意に立ち返り、組織における学習を理論的に再検討し、事例分析を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題の学術的意義は、これまで経営学の領域において十分に議論されてこなかった状況的学習の含意を踏まえた上で、組織における学習について理論的・経験的検討をおこなった点である。具体的には、学習におけるアイデンティティの変化としての側面や学習に伴う組織内の権力関係の変化について事例分析を通じて明らかにした点であるといえる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research project is to theoretically and empirically clarify the learning processes occurring in organizational settings from the perspective of situated learning theory. Previous applications of situated learning theory in the field of management studies have focused on the contribution to organizational performance produced by communities of practice, and have focused on only a small part of the theoretical implications for learning that situated learning theory has had. Therefore, in this study, we returned to the theoretical implications of situational learning theory, reexamined learning in organizations from the theoretical perspective, and conducted a case study analysis.

研究分野：経営管理

キーワード：組織における学習 実践共同体 参加としての学習 アイデンティティ

## 1. 研究開始当初の背景

学習現象を捉える概念枠組として、1990年代より Lave & Wenger (1991) を嚆矢として状況的学習論が展開されてきた。彼らは、学習を捉えるための新たな分析単位として実践共同体 (Communities of Practice; 以下、CoPs) や正統的周辺参加の概念を導出し、認知的次元ではなく CoPs への参加の次元に焦点化することで、学習を個人の変化ではなく、実践への参加を通じたアイデンティティの変化を含む社会的かつ全人格的な変化として捉え直し、新たな学習研究の地平をもたらした。

経営学においても状況的学習論の視点が積極的に導入され、先行研究では、例えば CoPs を組織内外のメンバーで構成される「私的な勉強会」や「異業種交流会」と同定した上で、公式組織では得られない新たな学習機会を提供する非公式集団として理解されてきた。さらには、暗黙知共有の促進や組織の硬直化の防止、イノベーションをもたらす存在など、組織のパフォーマンスに大きく貢献する存在として好意的に受け入れられてきた。従って、経営学の領域では、いかにして CoPs を成功させるのが主要な論点とされた。

このような展開は、ナレッジマネジメントの領域において多く研究成果がもたらされ多大な貢献を生み出した一方で、状況的学習論がもたらした学習に対する理論的な示唆に対し、十分に経営学の中で議論がなされたとは言い難い。これまでの管理志向の研究では、どちらかと言えば実践共同体における「共同体」という調和的な集合体の側面に焦点が当てられ、むしろ「実践」の側面、すなわち実践論といった状況的学習論が本来依拠した枠組みが注目されることは僅かであった。そのため、状況的学習論を経営学にて展開する上で一つのアプローチは、実践論を理論的基礎として改めて組織における学習とは何かを問い直すことであろう。そうすることで、これまでの研究とは異なる形での学術的貢献が期待されるはずである。

## 2. 研究の目的

本研究課題は、上記の背景にもとづき、状況的学習を応用するにあたって十分に検討されることのなかった側面に焦点を当てながら、組織の現場における学習や知識移転の現象について理論的・経験的な検討を行うものである。特に「共同体」ではなく、経営学の領域では軽視されてきた「実践」の観点、すなわち実践論の観点から再度検討し直すことで俎上に載せられる、社会的実践への参加形態の変容、アイデンティティの変化、組織内の権力関係の変化について具体的な事例を通じて明らかにしていく。

## 3. 研究の方法

本研究課題では、大別して二つのフェーズのもとで研究が遂行された。一つ目は、経験的調査を実施するための概念枠組みの検討であり、二つ目は、概念枠組みを用いた経験的調査を行い、具体的な実践の状況について分析を行うことである。

本研究課題において概念枠組みを検討する上で重要であるのは、これまでの経営学における先行研究において、状況的学習のいかなる部分が焦点化されてこなかったのかについて明らかにすることである。そのため、先行研究の広範なレビューを実施し、本研究課題における具体的な論点を導出した。

次の段階は、この論点をベースに、企業の実践について具体的な分析を遂行することである。本研究課題では、2つの企業組織の事例の分析を実施している。手法としては、定性的なアプローチを用いており、インタビューデータや観察によって得たビジュアルデータやメモ、リサーチサイトより提供いただく内部資料、また調査事例に関係する業界や国内の動向に関する資料を用いて分析が行われた。

## 4. 研究成果

### (1) 理論的な検討

理論的な検討については、広範囲な先行研究のレビューを通じて、これまでに十分検討がなされてこなかった課題について浮き彫りにして論点を整理し、概念枠組みを構築する形で実施された。まずは Lave & Wenger (1991) や Wenger (1998) を中心とする状況的学習において重要であるのは、社会的実践への「参加(ないしはアクセス)」という観点から学習をとらえていくことであった。そのため、小江(2018)では、組織のコンテキストにおいてどのように組織成員の参加としての学習が生じ得るのかについて検討を行っている。その結果、周辺の参加、周縁的参加、CoPsの境界の横断、共同体間の協働的参加、利害調整や関係構築としての参加の5つの類型について整理された。この実践への参加に関わる事例分析については、後述する自動車部品サプライヤーの分析の一部反映されている(e.g., 小江, 2020b; 小江&櫻井, 近刊)。

さらにこれまでの経営学における CoPs の関する先行研究についてレビューを実施している。

この作業をもとに、CoPsの成功要因を「CoPsの状態」「支援者の役割」「組織からの支援」の観点から整理している(小江, 2020a)。さらにこれら管理的な側面を志向する先行研究のレビューから浮き彫りになったことは、状況的学習の本来的な含意であった学習に関わるアイデンティティの側面、また学習プロセスにおいて生じる権力関係の変化に関する分析が十分でないという点である。この点については、すでにFox(2000)やContu & Willmott(2003)によって指摘されてきたことであるが、改めてその議論の必要性を示唆するものであった。

## (2) 事例分析

これらの理論的な検討を踏まえ、経験的検討として事例分析を実施した。具体的な調査対象として、本研究課題では地方行政機関と大手自動車部品サプライヤーの2社からの協力を得ることができた。

アイデンティティの検討については、地方行政機関を題材として分析している。この事例では、男性職員が育児休業取得を通じてどのようにアイデンティティが変化し、またそれと共に仕事実践に変化が生じたのかについてヒアリングを通じて調査した(櫻井&小江, 2020)。結果としては、家庭における育児者としてのアイデンティティ形成として「育児への大変さの気づき」や「育児を担う父親としての意識」「育児者の視点の獲得」の変化が見られたのに加え、そのアイデンティティが職場に持ち込まれることで、休業期間に関する不安や職場復帰に対する不安、また周囲からの男性職員に対するキャリアへの期待のプレッシャーを感じることに繋がった一方で、自身のロールモデル化への意欲をもつなど、これまで抱いていた職場におけるアイデンティティへのゆらぎが見いだされた。さらに、こうしたアイデンティティの変化は、育児や家事をするための男性職員の計画的な業務遂行や定時内での業務の切り上げ、円滑な業務遂行のための同僚間のスケジュール共有や引き継ぎ事項の共有という働き方の効率化や、業務に対する育児者としての視点の適用、相談相手のシフトといった形で仕事実践の変化を生じさせていた。この成果については必ずしも学習の文脈で検討されたものではないものの、家庭と職場というそれぞれの実践の境界の横断を通じたアイデンティティや参加のあり方の変化を明らかにしたものと捉え直すことができる。

そして参加(アクセス)や権力関係の変化についての検討は、自動車部品サプライヤーの事例を通じて検討された。この事例分析では育児をする女性従業員専用の生産ラインが製造されたことで女性従業員たちにどのような学習が生じたのか(参加に変化が生じたのか)に注目している。この組織において、既存の生産ラインにおける業務遂行のあり方や道具・設備は、主にフルタイムで働く男性視点をベースに設計されていることから、男性中心の組織体制ならびに物質のアレンジメントが形成されていた。従って、時短勤務や突発的な休務がやむなく発生してしまう育児中の女性従業員は、生産ラインの中で疎外感を感じながら周辺的な参加を余儀なくされてしまう。そうした中で、育児をする女性従業員専用の生産ラインが設置されることになり、その設置や稼働のプロセスにおいて女性従業員たちのアイデンティティや参加形態・アクセスの変化、また組織内の関係性の変化が生じていることが明らかになった。具体的には、女性目線の生産ラインとなったことで働きやすくなったのみならず、疎外感を感じていた生産ラインから解放されたことによる新たな「居場所」の創出を通じた働きやすい風土の形成、女性従業員の新たな責任感の醸成、女性従業員同士の作業の連携、上層部との関係性の変化の生成、また自身のキャリアに対する考え方の変化が生じていたことを明らかにした(櫻井・小江・渡邊, 2020)。

さらには、この事例では、参加の変化によって、組織内における権力関係に変化が生じたことについても明らかにしている。男性視点の生産ラインに従事するという形で、ある意味で抑圧された参加を余儀なくされていた状況から、国内でも珍しく社会的に注目された女性専用の生産ラインに従事していく中で、組織への参加がより積極的な形に変化していき、女性技能員が会社の上層部を動かすという形で両者の関係性が変化し、女性従業員の意見を通じて会社の制度やルールが変わることとなったことについて明らかにしている(小江&櫻井, 近刊)。

## <引用文献>

- Contu A. & H. Willmott (2003) "Re-Embedding Situatedness: The Importance of Power Relations in Learning Theory", *Organization Science*, Vol.14, No.3, pp.283-296.
- Fox S. (2000) "Communities of Practice, Foucault and Actor-Network Theory," *Journal of management studies*, Vol.37, No.6, pp.853-867.
- Lave, J. and Wenger, E. (1991) *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge University Press (佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習: 正統的周辺参加』産業図書, 1993年)。
- Wenger, E. (1998) *Communities of Practice: Learning, Meaning, and Identity*, Cambridge University Press.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 櫻井雅充・小江茂徳・渡邊丈洋	4. 巻 30
2. 論文標題 生産現場で働く育児中の 女性従業員のための職場づくり：トヨタ紡織豊橋南工場における「なのはなライン」の事例	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中京経営研究	6. 最初と最後の頁 13-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小江茂徳	4. 巻 4
2. 論文標題 実践共同体のマネジメント：成功要因に関するレビュー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 九州工業大学教養教育院紀要	6. 最初と最後の頁 11-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 櫻井雅充・小江茂徳	4. 巻 28
2. 論文標題 ワーク・ライフ・バランス実現のための管理職の育成	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中京経営研究	6. 最初と最後の頁 13-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小江茂徳	4. 巻 5
2. 論文標題 組織成員の学習と論点：状況的学習論を手掛かりとして	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 九州地区国立大学教育系・文系研究論文集	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 櫻井雅充・小江茂徳
2. 発表標題 男性による育児休業取得の効果
3. 学会等名 日本労務学会第49回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 櫻井雅充・小江茂徳
2. 発表標題 仕事と生活におけるアイデンティティの相互関係
3. 学会等名 日本労務学会（中部部会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 安藤 史江、筒井 淳也、佐藤 一磨、櫻井 雅充、小江 茂徳、余合 淳、喜田 昌樹、荒木 淳子、 国保 祥子、寺村 絵里子、水落 正明	4. 発行年 2020年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 184
3. 書名 変わろうとする組織 変わりゆく働く女性たち	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------